

広島県公立高校出題傾向と対策／国語

傾 向

【 概 要 】

国語の入試は大問4題から構成され、それぞれ「小説/物語/随筆」「評論」「古典」「小論文(作文)」というのが基本的な出題形式となっています。過去5年の平均点は23.9→23.5→23.6→26.5→21.5と推移しており、国語科だけでいえば直近の2021年度入試は過去10年間で最も平均点が低い結果となりました。問題総数はそのままに、記号選択問題が減り、記述問題が増えたことが最大の要因と考えられます。2022年度入試もそれ相応の難易度を想定しなければなりません、それでも全科目の中では比較的平均点が高めの教科となっています。それゆえ得点源となる教科であり、入試の最初の教科ですから、国語の出来、不出来は合否に大きな影響を及ぼす可能性すらあります。しっかりと演習を積み最大限準備して入試には臨みましょう。設問の全体的な傾向としては、前述の通り記号選択問題や本文からそのまま書き抜いてくる問題は減少傾向にあり、文章読解力・表現力・記述力を試す問題が増えてきているのが大きな特徴です。また、その記述問題の中には250字以内で書かせるものも出題されています。2021年度入試では、漢字の読み3問と書き2問の合計5問(前年度は6問)、記号選択問題が3問(前年度は5問)、語句・文章の抜き出し問題1問(前年度は出題なし)、記述問題が11問(前年度は9問)出題されました。

【分野別傾向】

文学的文章では、随筆の出題は極めて少なく今まで小説・物語がほとんどで、近代を代表する作家の書く文章が多く出題されています。評論文では、文学系、芸術系、自然科学系の3分野からの出題が多く、2021年度では指揮者、音楽家に関する内容が実際に出題されています。古典では「独ごと」という江戸時代の随筆文からの出題でした。やや硬いイメージの文章であるうえ読み取る資料が多いため難しいと感じる人も少なくないと思われます。漢文は2019年度入試に久方ぶりに出題されましたが2021年度も出題はありませんでした。来年以降出題される可能性はありますので、漢文の基礎知識は一通りチェックして演習しておきましょう。小論文形式の問題は8年連続大問4として出題されましたので、今後も150～250字程度の長文記述が出題されそうです。

対 策

【分野別対策】

文学的文章

文章中に書かれていること(あらすじや登場人物の心情など)を正確に読み取り、自分勝手な思いこみをしないことが大切です。「私はこう思う」から一歩進めて、「普通ならこう思うはずだ」という、より客観的な視点を持つように普段から意識して文章を読むトレーニングをしましょう。

説明的文章

まず、筆者の言いたいこと、つまり主題は冒頭もしくは最後の一段落に示されていることがほとんどです。それを正確につかむことが必要です。段落の全体的な構成は概ね『導入(プロローグ)⇒問題の提示⇒問題の考察⇒まとめ』のようになっています。

これらの流れの中で、それぞれの段落の役割を把握することが重要です。対策としては、教科書の論説文の書き写しが意外と効果的です。

古 典

古典は何よりも慣れ親しむことが大切です。教科書の古典の暗唱・音読が非常に効果的です。また、過去問を中心とした問題演習もしっかりとやっておきましょう。

小論文

「資料を客観的に読み取る」「自分の意見・理由を整理する」「それらをわかりやすくまとめる」といった練習が必要になりますので、普段の生活で見聞したものに対し常に自分の意見を持ち、それを文章にまとめる訓練をすると良いでしょう。

【設問別対策】

指示代名詞の内容把握は読解の基本ですから、前後3行を中心に指示内容をつかむ練習をしっかりと行いましょう。評論文では各段落の要点を表にまとめ、その内容を書かせる問題が近年よく出題されています。段落ごとの相互関係を意識しながら読解する訓練を積みましょう。また、段落ごとの要約の練習もしておきましょう。古典の歴史的仮名遣いは、読んだとき違和感のある「は・ひ・ふ・へ・ほ」⇒「わ・い・う・え・お」や「ゐ・ゑ・を」⇒「い・え・お」など基本的な書きかえの練習をしておきましょう。また「すべてひらがなにす」などの指示をよく読み、ケアレスミスのないように普段から心がけましょう。漢文の書き下しでは、「レ点、一・二点、上・下点」などの読む順序や、助詞や助動詞はひらがなに直すなどの基本を確認し身に付くまで演習して下さい。

